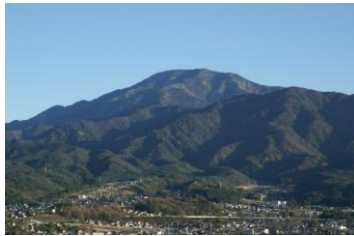




# ～なつかしの邦画旧作 名画シリーズ～ 第2弾!

豪華2本立て!!  
名作が今、スクリーンに甦る



## 続・青い山脈 雪子の巻 1957年作品

中津川・恵那をロケ地とした作品。雪村いづみ・司葉子 主演。

11月に上映した「青い山脈」の続編。多くのご要望にお答えして上映決定!

ぜひ、ご覧下さい! ※国内に現存する唯一のフィルム上映となりますので、上映中トラブルの起こる可能性がございます。



(c) 1960角川映画

## おとうと 1960年作品

巨匠市川崑監督の渾身の一作。

2010年に山田洋次監督が市川監督に捧げるためリメイクして話題に。

岸恵子 川口浩 田中絹代 などそうそうたる俳優陣で贈る名作。

姉弟愛に包まれた人情味ある作品です。

2012年

1月

29日(日)	続・青い山脈	おとうと
	11:00	14:00

上映時間

《1時間22分》

《1時間38分》

## アートピア付知交芸プラザ

☆全席自由☆  
前売・当日料金一律  
開場は30分前

12月10日(土)  
チケット発売予定

1作品 1,000円 ⇒

**特別割引価格!!**

チケット  
前売所

東美濃ふれあいセンター・中津川文化会館・付知公民館・福岡公民館・坂下公民館  
アビタ中津川店(S.C)・ダイソー楽器・アトラNOVA・三洋堂書店福岡店・町乃書店  
中津川市民病院売店・坂本ニュース販売・ピアゴ恵那店(S.C)・サラシヨッピングセンター

【主催】株式会社コロナ・中津川市・中津川市教育委員会 【お問合せ】東美濃ふれあいセンター TEL.0573-68-8000

## 映画 続 青い山脈 ～雪子の巻～

キャスト:雪村いづみ 司葉子 宝田明 太刀川洋一 久保明 淡路恵子 志村喬

監督:松林宗恵 製作:藤本真澄 金子正且 原作:石坂洋次郎 脚本:井手俊郎 撮影:小原譲治  
美術:村木忍 音楽:服部良一

### ■解説■

昭和二十四年同じ東宝で製作された石坂洋次郎原作『青い山脈』の再映画化で今回は東宝スコープ、アグファカラーで製作された。脚色は前回と同じく井手俊郎(近作は「初恋物語(1957)」)が話を現代風に改め、「ひかげの娘」の松林宗恵が監督した。撮影は「智恵子抄(1957)」の小原譲治。主演は「大当り三色娘」の雪村いづみ、「大学の侍たち」の宝田明、司葉子、久保明、「月と接吻」の淡路恵子、映画初出演の水谷良重。ほかに太刀川洋一、中北千枝子、志村喬、井上大助など。

### ■あらすじ■

沼田先生の負傷がおおりにかけた頃。偽のラブレター事件をめぐって、島崎先生が正しいか、生徒側が正しいかを定める海光女学校のPTA役員会が開かれた。学校の会議室には、校長をはじめPTA会長井口甚蔵、職員役員が集った。その中には梅太郎や、保護者代理になって入りこんだガンチャンの顔もみえた。国漢の岡本先生が問題のラブレターを読みあげた後、両者烈しい論議が展開された。井口の提案で役員による投票により、どちらが正しいかを決めることになった。結果は島崎先生側が八票、生徒側が六票で意外の結果に井口は狼狽した。ところがその時、ガンチャンの資格が問題になって、雪子は窮地に追いこまれた。しかし井口の弱味を握っている梅太郎の逆襲で、島崎先生の勝利は決定的になった。沼田と雪子は喜びに感激的な視線をかわすのだった。その頃、六助と新子は湖でボートに乗っていた。そこへ井口の子分たちがいたずらをしかけて来た。水泳のうまい新子は、六助を助けて相手を負かした。興奮した新子はおもわず「私は六助さんが好きだわッ」といった。岡本先生が宿直の晩、校長室に泥棒が入った。捕えてみると松山浅子だった。浅子は偽のラブレターの生んだ事件を苦にして、焼いてしまおうと思ったのだった。その翌日浅子は新子にすべてを詫言った。新子も雪子も優しく浅子を許してやった。カラリと晴れた日曜日、雪子と沼田、新子と六助、和子やガンチャンたちの一行は、自転車でハイキングに出かけた。丘の上で沼田は雪子に結婚を申込み、彼女も喜んで承諾した。六助は見晴台にかけのぼり、「新子が好きだ」と大声をはりあげた。白い雲、そして山々は青くかすんでいた。

## 映画 おとうと

キャスト:岸恵子 川口浩 田中絹代 森雅之 仲谷昇 浜村純 岸田今日子 土方孝哉 夏木章  
伊丹十三 佐々木正時 星ひかる 飛田喜佐夫 伊東光一 江波杏子 穂高のり子 森矢雄二  
横山明 森一夫 篠崎一豊

監督:市川崑 企画:藤井浩明 製作:永田雅一 脚色:水木洋子 原作:幸田文 撮影:宮川一夫  
美術:下河原友雄 照明:伊藤幸夫 音楽:芥川也寸志 録音:長谷川光雄

### □解説□

幸田文の原作を、「キクとイサム」の水木洋子が脚色し、「ぼんち」の市川崑が監督した、若い姉弟の物語。撮影は「切られと三郎」の宮川一夫。この作品では時代の雰囲気を出すために彩度を落としコントラストを残す現像方法「銀残し」が生み出された。

### □あらすじ□

げんと碧郎は三つちがいの姉弟である。父親は作家で、母親は二度目であり、その上手足のきかない病で殆ど寝たきりだった。経済状態も思わしくなく、家庭は暗かった。碧郎が警察へあげられた。友だちと二、三人で本屋で万引したのが知れたのだ。しばらくたったある日、げんは鳥打帽の男に呼びとめられた。男は警察の者だと名のり、碧郎や家のことを聞いた。男は毎日のようにつけ始めた。そんなげんを碧郎は「親がちよっと名の知られた作家でよ、弟が不良で、お母さんが継母で、自分は美人でもなくて、偏屈でこちんといる娘どくりゃ、たらされる資格は十分じゃないか」というのだった。転校してからも碧郎の不良ぶりははげしかった。乗馬にこりだし、土手からふみはずして馬の足を折ってしまった。碧郎はその夜童貞をどこかへ捨てた。二年たった。十七になった碧郎に思わぬ不幸が訪れた。結核にやられたのである。湘南の療養所へ転地し、げんが付きそった。死が近づいてくると知った碧郎は、げんに高島田を結うよう頼んだ。「姉さんはもう少し優しい顔する方がいいな」といいながらも、げんの高島田を見て碧郎はうれしそうだった。父が見舞いに来た時は、治ってから二人で行く釣の話に夢中だし、足をひきずってきた母には、今までになく優しくなった。夜の十二時に一緒にお茶を飲もうと約束して寝たげんは、夜中に手と手をつないだりボンがかすかに引かれるのを感じて目を覚ました。医者が来た。父や母も飛んできた。「姉さんいるかい」それが碧郎の最後の言葉だった。風のある晴れた寒い夜だった。